

## 近江朝文学史の課題

——良辰・美景と君臣一体の和歌——

辰 巳 正 明

### 一 はじめに

古今集は和風の完成を示す和歌集でありながらもそれを $\wedge$ 和歌 $\vee$ であると認定するためには、長い漢文学の時代を経なければならなかった。しかも、 $\wedge$ 和歌とは何か $\vee$ という根源的な問を設定し、その歌学の追求の上に古今集の成立を見たとき、古今集は個々のすぐれた歌の集積の上に、総体としての和歌集の完成を果したのである。その歌学は、いうまでもなく古今集仮名序・同真名序に結集されるが、両序の果した大きな役割は、和歌の本質を問うことからはじめ、その効用や姿、あるいは文学の歴史や文学批評という和歌の理論を成立させたところにある。いわば、歌学によって緻密に構成された古今集という一つのテキストは、それ自身で完結した宇宙を

われわれの前に現出させる。しかも、そのテキストが勅撰という公を背負うことによって、天皇制の秩序を（あるいは、天皇制の宇宙を）説明する原理としても成立した。

そのようなテキストの宇宙的構成は、例えば類書などのそれに等しい。漢文学が古今集の宇宙を完成させたのである。そればかりではない。古今集の個々の和歌にあって、詩語との習合を通して新たな和風が成立した。だから、和風とは漢風と対立する概念ではなく、漢風と同化・習合することで完成した $\wedge$ 和 $\vee$ なのであり、その $\wedge$ 和 $\vee$ の集合した和風が古今和歌集なのであった。日本人が $\wedge$ 和 $\vee$ の観念を獲得したのは、そうした相対的意味においてであっただろう。

それゆえ、古今集は今日漢文学の問題を避けて論ずる

ことは困難である情況を示しているように思われる。何よりも古今集は平安朝初頭漢文学の時代を経過すること  
で成立した文学であることを思えば、それは必然的な結  
論である。<sup>(1)</sup>

漢文学の時代の洗礼を受けて、そこにみごとな和風の  
文学が成立するという、この逆説性は必ずしも古今集に  
限ったことではないであろう。古典期の日本文学は、そ  
のような構図をつねに内包しているといえる。ただ、上  
代文学に関していえば、上代はようやく漢文学に接しは  
じめた段階であり、その影響は表層的なものであるか  
ら、漢文学の問題はそれほど重要視されないという傾向  
がある。むしろ、漢文学は表記の問題にとどまり、こと  
のほか、歌はそのような影響をほとんど受けていないと  
いう見方も根強くある。

たしかに、上代において平安初頭の国風暗黒時代とま  
で呼ばれた漢風謳歌の時代を見出すことはできない。そ  
れゆえに、上代文学は日本的な純粋性を保持する文学で  
あるという国粹主義的文学観がいつまでも通用すること  
になる。上代文学へのロマン主義は、このような文学観  
と重なることで大きな不幸を招いているように思うので  
ある。

上代文学の成立する前段階に漢文学時代（国風暗黒時

代）が存在し、その洗礼のもとに上代文学が出發したと  
考えることはできないが、しかし、聖徳太子以後、殊に  
大化改新以後の日本は漢文学の時代であったと考えるべ  
きである。<sup>(2)</sup> だから、万葉集以後に漢文学の隆盛があつた  
のではなく、万葉集が終焉しても漢文学の時代がそのま  
ま平安朝初頭漢文学へと継続したに過ぎないのである。  
その情況は、万葉集の終焉によって漢文学の日常性が表  
面化した現象を示すものであつて、それは日本文学史研  
究の抱えている一つの偏向性を示唆しているのである。

万葉集は古今集のような成立情況を経ていないとして  
も、万葉集の内包した漢文学の文学史的情況は決して軽  
いものではないと思われる。その情況は、大化以降の漢  
風化によって、初期万葉の近江朝に最初の花を開かせた  
のである。額田王の「天皇、詔内大臣藤原朝臣、競春山  
万花之艶秋山千葉之彩時、額田王、以歌判之歌」（卷一  
・一六）という複雑な題詞をもつ作品は、歌が漢文学と  
習合する文学史的情況をよく物語っているように思え  
る。かつ、それは以後の文学史へも深くかかわる問題で  
あつたように思うのである。ここでは、この文学史的情  
況について俯瞰しておきたい。

## 二 君臣一体と和歌の理念

近江朝が大化以後の大陸的文化を基盤として成立したと考えるとき、その文学における出発も漢文学と習合することによってあり得たと推測することができる。柿村重松氏は、この近江朝の文学に触れて、その特質を次のように指摘したのは重要な内容である。

支那文物の模倣が漢文の発達を促がしし第二事由は朝廷遊宴を行ひ、文人をして詩文を作らしめしことなり。朝廷遊宴を行ひ給ひしことは往古よりして已に之あり。必ずしも支那に模倣せしにあらず。然れども遊宴に文人を召して詩文を作らしめられしは隋唐の風に倣ひしなり。支那に於て天子遊宴に文人をして詩文を作らしめしは亦前代よりして已に之れあり。必ずしも隋唐に始まりしにあらず。然れども唐の太宗の如き、四方の禍乱を戡定して、天下清平朝野歛娛、乃ち屢々群臣を会し、醜を賜ひ詩を賦し、以て雍和の化を文飾しき。而して是れ即ち我が朝廷の規模とせしものにあらずや。我が朝遊宴に文人をして詩文を作らしめられしは、全く遺隋遺唐の使節学生が伝へし当時の支那の風習に倣せしものなること蓋し疑を容れず。

ここに柿村氏は、近江朝の宮廷文学の特質を宮廷遊宴に位置づけるとともに、以後の漢文学史の趨勢を概観するのだが、まず、近江朝文学を君臣和楽の宮廷遊宴の文学に求めたのは卓見であった。「懐風藻」の序文も、近江朝にはしばしば詩酒の宴が行われたことを記しているのも、近江朝の宮廷遊宴の文学を示唆するものである。すでに大化以降の大陸文化の受容は、政治・社会の変革にとどまらず、新たな文学表現の成立を促したのである。

おそらく、近江朝の漢文学は漢詩という新たな文学表現にとどまらず、同時に和歌表現の形成にも及ぶ問題を孕みもっていたに違いない。一般に近江朝の文学は額田王という著名な女流歌人の存在によって和歌文学の側面から論じられる傾向が強いのだが、それは近江朝文学の一端を示すに過ぎない。むしろ、近江朝が漢文学による宮廷遊宴の文学を形成する情況から考えるならば、小島憲之氏が説くように、そこに詩と歌との交流によって形成される和歌の文学史的意味を問うべきである。<sup>(4)</sup> いわば、近江朝の文学史的意味を問うとは、近江朝の歌が漢文学と習合することにおいて、そこにどのような和歌文学を形成したかを文学史として明らかにすることである。

このような近江朝文学への視点は、額田王の歌をもつて和歌文学の形成を語るのではなく、漢文学をも含めた近江朝文学史を想定する態度の中から出発するものであるといえる。中西進氏も額田王と近江朝漢文学との問題を積極的に論じているのは、そのことによって得られる文学史情況の正確な把握にある。<sup>(5)</sup>

近江朝の漢文学は、壬申の乱の際にそのほとんどが滅亡したと伝えられる。懷風藻の編者はそのことを惜しみながら、近江朝の文学情況について次のように記している。

淡海先帝の命を受けたまふに及<sup>お</sup>至<sup>よ</sup>びて、帝業を恢開し、皇猷を弘闡したまふ。道は乾坤に格り、功は宇宙に光れり。既にして以為<sup>おも</sup>ほしけらく、風を調へ俗を化むることは、文より尚きことは莫く、徳を潤らし身を光らすことは、執か学より先ならむと。爰に則ち庠序を建て、茂才を徴し、五礼を定め、百度を興したまふ。憲章法則、規模弘遠、覓古<sup>もと</sup>より以来、未だ有らず。是に三階平煥、四海殷昌、流績無為、巖廊暇多し。旋文学の士を招き、時に置禮の遊びを開きたまふ。此の際に当りて、宸翰文を垂らし、賢臣頌を献る。雕章麗筆、唯に百篇のみに非ず。但し時に乱離を經、悉煨燼に従う。言に湮滅を念ひ、軫

悼して懷を傷ましむ。<sup>(6)</sup>

天智天皇の近江朝では、まず文章と学問とが重んじられ、諸制度が整えられた結果天下は泰平の時を迎えた。したがって、天皇は文学の士を招いて「置禮の遊び」を開き、天皇自らも詩文を作り示すとともに、賢臣たちも天皇を讃める頌詩を献上したというのである。

おそらく、懷風藻序文の記す近江朝の文学情況は、一つに理念的な姿を含みもっているのではないかと思われる。ここにそれが理念的であると考えられるのは、天智天皇が文章と学問とを重んじた結果として天下が泰平となり、文学の士が集って詩酒の宴が催されて、天皇と臣下とが共に詩を詠みあったというところに窺い知る、理想的な君臣一体の詩観（謂わば、君臣和楽、君臣調和の道具としての詩のあり方）を示唆しているところにある。それはまさに文学の理念的姿であったに違いなく、天智天皇にとっては大化改新の理念の一つの完成された姿が君臣一体の詩観にあったと見られるだろう。そして、中国において詩文そのものあり方がかかる中においてあったことは、曹丕の「文章は経国の大業にして、不朽の盛事なり」（「典論」論文）を持ち出すまでもなく自明のことであったし、平安朝漢文学の出發を告げる嵯峨天皇の勅が「経国治家、莫善於文、立身揚名、莫尚於学」

『日本後紀』弘仁三年五月)であったのも偶然ではなかつた。懷風藻の序文も嵯峨天皇の勅も、詩の理念を共通の詩観とすることで成立しているのである。そのような漢文学史の情況から、近江朝の時代には遊覧・遊宴にもなう中国的君臣和楽の詩文が盛んに制作されていて、額田王の登場もこのような空気の中において理解されるべきだと説くのは橋本達雄氏である。近江朝の文学史的情況は、まずこのような問題を基本として出発する必要があろう。

文学の時代と情況を異にしているが、やはりこのような理念的文学観の中から、新たな和歌の出發を説いたのが古今集仮名序であつたように思われる。仮名序は和歌の復権について、次のように説いているのである。

今の世の中、色につき、人の心花になりけるよ  
り、あだなる歌、はかなき言のみいでくれば、色好  
みの家に、埋れ木の人知れぬこととなりて、まめな  
る所には花すすきほにいだすべきことにもあらずな  
りにたり。

その初めを思へば、かかるべくなむあらぬ。いにし  
への代々のみかど、春の花のあした、秋の月の夜ご  
とに、さぶらふ人々をめて、ことにつけつつ、歌  
をたてまつらしめ給ふ。あるは花をそふとて、たよ

りなき所にまどひ、あるは月を思ふとて、しるべな  
きやみにたどれる、心々を見給ひて、さかしおろか  
なりとしろしめしけむ。

仮名序がこのように言うとき、歌の理想的姿(「まめ」なるものとしての和歌)は、尚古思想によって、上古の世々の天皇の時代へと求められて行くが、それ自体が理想追求の姿である。その理想的な上古の世の天皇は、春の花の朝、秋の月の夜ごとに臣下を召しては歌を献上させたのだという。そのことの中に、まめなる歌の理念が語られていることに気付く筈である。

懷風藻の序と古今集の仮名序との一致は、やはり偶合ではない。そこにも詩を共通の理念とする詩観が深く横たわっていると見るべきである。懷風藻序が理想的な君臣一体の詩観を説いたように、古今集仮名序も君臣一体の和歌観を主張しているのである。そして、古今集仮名序がもっともまめなる歌の理想としたのが、ならの帝と柿本人麻呂との関係だった。つまり、「かの御代や、歌の心をしろしめしたりけむ。かの御時に、おほきみつにくらひかきのもとの人まろなむ歌の聖なりける。これは君も人も身をあはせたりといふなるべし」というとき、それは歴史的な実体を超えて取り出された、理念としての「君も人も身をあはせ」る君臣一体の和歌観の標榜に

ほかならないのである。

古今集が万葉集終焉後の平安朝初頭漢文学の洗礼を受けて成立した図式は、近江朝文学の成立を十分示唆するものであるように思う。本居宣長は古今集仮名序に基づきながら、和歌を政道の助けと考える風潮に対して厳しく批判する姿勢を示したが、古今集は君と人とが身を合せること、すなわち君臣一体を和歌の理念とし、そこに詠まれる和歌が君臣和楽あるいは君臣調和の文学としての位置を占めることを主張しているのである。

むしろ、古今集真名序はさらに明確にこのことを説いている。そこでは、

古天子、每良辰美景、詔侍臣預宴筵者、献和歌。君臣之情、由斯可見。賢愚之性、於是相分。所以隨民之欲、扱士之才也。

のごとく、古い世に理想的天子を設定しながらも、その理想の天子は良辰（美しい季節）美景（美しい風景）のたびごとに、遊宴を開き、侍臣に詔を下して和歌を献上させたとする。そのことを通して君臣の情を見るべきだと説くのである。

まめなる歌とは、このような君臣一体の和歌観の中から成立する公的和歌（色好みの歌と対立する）にあるが、そのような和歌観を支えていたのは、もちろん毛詩

序をはじめとする詩学にあったことは事実であり、このことを漢文学史の上から展開したのが懐風藻の序であったということである。

それでは、近江朝文学がそのような理念を持ったとして、それは実体としてはどのような出発を見たのかが問われるだろう。それはあくまでも懐風藻序の描いた理念的立場に過ぎないとも考えられるからである。

今日、懐風藻に残る近江朝の漢詩は、大友皇子の五言詩二首のみである。その内の一首は次の詩である。

五言 侍宴 一絶

皇明光日月 帝徳載天地 三才並奏昌 万国表臣義

「侍宴」という題は、近江宮廷が文学の士を招いては置體の遊びを開いたという、懐風藻序と対応した題であろう。置體の遊びは、宮廷における君臣和楽の重要な役割を果す遊宴であり、「侍宴」という題によって「賢臣頌を献る」といった、賢臣側の天皇との和楽を示す題でもあったのを知るのである。遊宴がそのようなことによって、宴は儒教的君臣調和を構成する原理として、また、理念として働いた。だから、皇明（天皇の威光）は日月の輝きと等しく譬えられるのであり、帝徳（天皇の仁徳）も天地の広大さに譬えられた。その結果として、天地人の三才はともに安らぎ盛んであることが述べ

られ、そこに君臣の調和や宇宙万物の調和と繁栄とが讃めたえられるのである。さらには、かかる天皇の徳によつてすべての国は、天皇に臣義を表わすのだというのである。

大友皇子の詩が君臣の調和をこのように詠んだのは、君臣の紐帯を示す早い段階の文学への受け入れであったと思われるし、近江朝はこのような新しい君臣関係を編成する時代であったと思われる。大友皇子の侍宴詩は、近江朝の時代の要請の中に登場した、時代の思潮を体现する詩であつたと考えられるだろう。

このような近江朝の漢文学の状況を想定するならば、額田王の作品（巻一・一六）の題詞の示唆している情况も理解できる。この作品の題詞によると、△天皇▽が△内大臣▽に△詔▽として、「競春山万花之艶秋山千葉之彩」という題を提示していることである。それは、額田王の作がどのような成立事情をもっているかを明確に語る題詞でもあつた。天皇の下した詔は、春花秋葉の美しさを競えというものだが、近江朝は政治や諸制度の改革のほかに、こうした宮廷における余剰の文化を形成しているのも、懐風藻の序の記すところであり、藤原鎌足（大織冠伝）にも、「朝廷无事、遊覧是好。人无菜色、家有余蓄。民咸称太平之代。帝召群臣、置酒滨楼」（天

智七年正月）と見るように、近江朝宮廷の遊宴の情况进行録しているとおりでである。近江朝は新しい大陸の文化受容の中で太平の時代を迎え、宮廷人は天皇の催す遊覧（遊宴）を楽しみ、滨楼で置酒の宴が開かれて、宮廷遊宴の文化が花開いて行ったのである。

宮廷の置酒の遊びは、それ自体が大陸風な雅会（置酒滨楼）であつたが、その遊宴には天皇に招かれたすぐれた詩人、文人たちが詩を詠み天皇に献上した。だから、「宸翰文を垂らし、賢臣頌を献る」（懐風藻序）という詩の情况は、まずこのようなところから想定されるべきである。

このような置酒の宴に、天皇自らが詔として詩題を提示したことは、近江朝の宮廷が遊宴をとおして深く大陸風な文化宮廷へ歩み出したことを語るものであり、和歌史の上では高く評価されなければならない。そして、天智天皇の詔によって下された題の内容が、先の古今集仮名序の記す「春の花のあした、秋の月の夜ごと」と対応する良辰、美景（古今集真名序）を指すものであることを思うとき、春秋という季節は、事実としての季節を指すだけではなく、もっと理念化された意味を含みもっていることが推測されるのである。それは、真名序の示す△良辰・美景▽がそれに該当するし、それゆえにそこに

「君臣之情」を見る一つの素材として、春秋の良辰・美景が取り出されたことであろう。むしろ、良辰・美景の集約されるところに春秋という季節があるということであり、それはまた、君と臣下とが一体となる和歌の理想の姿をも暗示しているのだということである。

額田王の作品の題詞は、およそ右の状況を説明しているように思われる。その一つが△天皇▽による△詔▽であり、その詔を受けたのが△内大臣▽であるという、この君臣関係についてである。もう一つは、天皇の詔に見る「春山万花之艶」と「秋山千葉之彩」を競うことを提示した、その良辰・美景のあり方についてである。そして、このことよって、詩人・文人たちが天皇に詩を献上するのは、その実態的側面の問題である。ここで天智天皇が内大臣鎌足に詔を下したことを記しているのも、君臣の情を強く意識することにおいてであったと考えるべきである。この意識の背後に、君臣の関係が儒教的倫理観の中にあることを既定の条件として認めている意識が見られるし、しかも、このような政治的倫理観が古今集の序で繰り返されるのは、それがあくまでも君臣和楽の理念にあったからであり、宮廷遊宴が何よりも君臣の紐帯を約束するものとして理念化されたのである。

天智天皇の詔は、内大臣鎌足をとおして遊宴に待す詩

人・文人に下された詩の題であった。<sup>(10)</sup>この題がなぜ春秋の美しさを競うことを求めたのかはすでに述べたとおりである。この題に基づいて詩人・文人たちは、春秋の美を詠むことになる。それを古今集仮名序の表現を借りるならば、「あるは花をそふとて、たよりなき所にまどひ、あるは月を思ふとて、しるべなきやみにたどれる」ということになり、天皇は臣下のそのような姿を見て「さかしおるかなり」と判断するのであった。それが仮名序の描いた上古の世の理想的君臣関係であり、そこに詠まれるのがまめなる歌であったのである。

近江朝の君臣和楽の実現は、もちろん漢文学（漢詩）によって実現されるものである。ところが、ここに漢詩ではなく歌によって詠んだ歌人が登場したのである。それが額田王であったのだが、それはまた新たな和歌への出発を告げる文学史的課題を抱えこんだのである。

### 三 良辰・美景と君臣の和楽

ここに額田王の作品の題詞が示唆する近江朝文学の一端を予見することが可能であろう。天皇の詔（題）にいう、春秋の美しい季節と風景は、君と臣下とが調和する理想的君臣関係を構成する、理念的な良辰（春秋）と美景（花葉）である。そのことを真名序は「毎良辰美景、



詔侍臣預宴筵者、獻和歌」と言ったのであり、それが「君臣之情、由斯可見」であった。

こうした君臣和楽の理念は詩の理念であるが、おそらく、このような君臣の和楽と詩宴との關係を理想としたのは、魏の曹丕であったと思われる。その理想の君臣關係を再現したのは、中国六朝時代を代表する宋の詩人の謝靈運であった。謝靈運は「擬魏太子鄴中集詩八首」〔文選〕卷三十を詠み、詩と理想的君臣關係とを曹丕に求めて、理念としての詩のありようをここに再現するのである。

魏の文帝曹丕は、太子の折りに東閣講堂において詩人たちに詩を賦すことを命じ、自らも詩を詠み、それを「鄴中集」としてまとめた。謝靈運の作は、いま太子曹丕の「鄴中集」に擬して、それを再現しようというものである。その体裁は、曹丕の作に擬した序文と、太子、王粲、陳琳、徐幹、劉楨・応瑒・平原侯植ら八人の詩を擬作する。そして、これらの詩の内容においては、魏の太子を君として臣たる七人の詩人が詩を以って君臣の和楽を詠み、ここに君臣の理想的關係が構成されていくのである。

建安の末、余時に鄴宮に在り。朝に遊び夕に讌し、  
歛愉の極を究む。天下の良辰美景賞心楽事、四者擗

せ難し。今昆弟友朋、二三の諸彦共に之を尽せり。古来この娘、書籍に未だ見えず。何となれば楚の襄王の時、宋玉唐景あり。梁の孝王の時、鄒枚嚴馬あり。遊ぶ者美なりとす。而も、其の主は文ならず。漢の武帝の時、徐楽諸才應對の能に備はれり。而も、雄猜多忌なり。豈晤言の適を獲んや。方将を誣ひず。庶くは必ず今日を賢れりとせんのみ。歲月流るる如く、零落して将に尽きんとす。文を撰し人を懐ひ、往に感じて愴を増す。其の辞に曰く、

この序は、太子曹丕が建安の末（西暦二二〇年ころ）

に、太子の宮殿である鄴宮にあって、朝夕に遊讌を開き歛愉を極めたことをのべる。およそ、天下の良辰・美景・賞心・楽事というこの四つは、同時に併せもつことは困難であるが、いまそのすべてが揃ったというのである。しかも、このことは古来より書物に見出すことはいかないのだともいう。

ここに、朝夕の遊讌と天下の良辰・美景・賞心・楽事とが一つのこととして取り上げられる。ことに、良辰・美景・賞心・楽事の四つは、同時に得ることは困難であるというから、その四つが揃うことが遊讌にあっては理想的であることを示している。

それでは、遊讌においての天下の良辰・美景・賞心・

楽事とは何を指しているのか。良辰・美景の語は、すでに真名序に見えた。天皇は良辰・美景ごとに侍臣の宴席にある者に詔して和歌を献上させたという、その良辰と美景とである。これに対応する仮名序の表現を借りるならば、「春の花のあした、秋の月の夕べ」ということであり、春花秋月の朝夕が良辰・美景を指すことになり、謂わば、天下の最もすぐれた季節とその美しい風景である。賞心はこの良辰・美景を美しいとめである心を指し、楽事は、この良辰・美景をめめて詩文を作り、遊讌の歓楽を尽すことであろう。

天下の最も良いとされる季節に美しい風景にめぐりあうことも難しいが、さらに君と臣下たちとでその美しさを賞でることとそれを詩に詠むことが加わるのだから、困難さは一層増すことになる。だから、これらの四つは一時に得ることは無理だと考えられたのである。

それゆえに、古来、このことが書物に記されていないのである。その理由は、楚の襄王の時に宋玉・唐勒・景差という詩人があり、漢の梁孝王の時に鄒陽・枚乗・嚴忌・司馬相如という詩人がいたが、しかし、その主君は文学への理解がなかったのである。また、漢の武帝の時には徐楽や他のすぐれた詩人・文人がいたが、武帝は疑い深く心を打ちつけて楽しむことはできなかったのだ。

る。

こうした、古来から困難とされて来たことが、いま朝夕の遊讌にすべて揃ったのである。そこから君臣和楽の詩の宴がはじまるのであり、主君と臣下との調和という理想が実現されて行くのである。そのことをもって、主人の曹丕はその詩に「澄觴金壘に満ち、連榻華茵を設く。急絳飛聴を動かし、清歌梁塵を払ふ。何ぞ言はん相遇ふこと易しと、此歎信に珍とすべし」と、この遊宴に歎楽を究めることは容易に得難いことであるから大切に歎を尽そうという。すぐれた詩人・文人たちが、曹丕（および、曹操）のもとに集まり、この遊讌に詩を詠むのだが、君も詩文を深く理解し臣下もすぐれた詩を君に献上する、その君臣和楽が目前に実現されようとしているのである。

この太子曹丕の序文と詩を冒頭に、続いて七人の詩人（建安七子）たちの詩が詠まれて行く。それらの詩人たちは、曹操や曹丕のすぐれた徳を讃め、このようにして君臣の歎を尽すことよろこびを歌うことを主旨としている。

並び載りて鄴京に遊び、舟を方べて河の広きに汎ぶ。清讌の娛に綯繆し、梁棟の響を寂寥す。既に長夜の歎を作す。豈乘日の養を顧みんや。（王粲）

朝に遊んで牛羊下り、暮に坐して掲鳴に括る。終歳一日にあらず。扈を伝へて新声を弄す。辰事既に諧ひ難し、歎願如今并す。唯羨む蕭々たる翰、繽紛として高冥に戻らんことを。(劉楨)

晚節衆賢に値ひ、会同して天宇に庇はる。坐を列ねて華横に陰れ、金樽清醪を盈す。始め延露の曲を奏し、継ぐに闌夕の語を以てす。調笑して輒ち酬答し、嘲諷して慙沮するなし。軀を傾けて遺慮なく、心に在りて良に已に叙ぶ。(応場)

これらは、いづれも良辰・美景のもとで朝夕の遊宴が行われて、その歎を尽したことを詠むものである。冒頭部分は省略したが、ここでは乱を収めた曹操の偉大さや、天下が太平となつてこのような遊宴が開かれたことを悦ぶ内容となつている。この七子の最後に曹植の詩が置かれている。

公子世事に及ばず。ただ遨遊を美す。然れども頗る憂生の嗟あり。朝に遊びて鳳閣に登り、日暮れて華沼に集る。柯を傾けて弱枝を引き、条を攀ぢて蕙草を摘む。徒倚して騁望を窮め、目極まりて討ぬる所を尽す。西のかた太行の山を顧み、北のかた邯鄲の道を眺む。平衢しくて且つ直く、白楊信に裊裊たり。副君飲宴を命じ、歎娛して懷抱を写く。良遊昼夜に

あらず、豈云んや晚と早と。衆賓悉く精妙、清辞蘭藻を灑ぐ。哀音廻鶻を下し、餘哇清昊に徹す。中山酔ふを知らず、徳を飲んで方に飽くを覚ゆ。願くは黄髮の期を以て、生を養ひて將に老せんとするを念はん。

朝夕に遊覧して眺望すると、西は太行の山、北は邯鄲の美しい景が眺められ、道はまっすぐに続き、白楊は風に揺れ動く情景が詠まれ、太子の飲宴の良遊は昼夜を問わず、衆賓の清らかな詩は蘭や藻の如きであり、歌声は鶻を舞わせ、酔を忘れさせて太子の徳を十分に覚つたという。この上は生を養い寿命を保つて老年に至るのを願うばかりだといふのである。

このようにして魏の太子曹丕の鄴中集に擬作された詩は、曹操(魏武帝)をも含めながら、一貫して太子の遊讌に視点を置いた、君と臣下とのすぐれた和楽の世界が展開された。そこには君臣の關係を遊宴を通して理念化する姿があり、遊宴(遊讌)のもつ意味がここに取り出されて来る。謝靈運がこのことを曹丕たちの建安詩に託したのも、後漢から魏の時代へ移つて現われた曹氏一族(謂わゆる、魏の三曹)の新文学運動と深く關係すると思われる。建安詩は、曹操・曹丕・曹植の父子の登場によつて出発を見るのだが、その詩の特徴について鈴木修

次氏は、「集团的創作活動」にあつたと指摘している。<sup>(14)</sup>

魏の新王朝は曹氏の官廷を背景に文学者が集い、新しい集团的創作活動の行われる文学の場を形成したのであつた。それは、先の序で良辰・美景・賞心・樂事の四者は併せ難く、古来このような詩宴は未見だとのべたことと符合する。集团的創作活動の場にあつて、はじめて右の理想が実現できるからであり、その実現が鄴宮遊讌を中心とする建安詩にあつたのである。『文選』卷二十の「公讌」部に見る公讌詩は、曹子建(曹植)、王仲宣(王粲)、劉公幹(劉楨)の詩を順次並べるが、曹子建と劉公幹の詩は先の鄴宮における遊宴の詩であり、王仲宣の詩は曹操の宴に詠んだものである。このように、『文選』の公讌詩が建安詩から出発し、しかも曹氏の遊宴を冒頭に配列することをみると、曹氏の遊宴が明らかに理想的君臣和樂の実現を示すものであることを認定したからに他ならない。鄴宮詩宴の二首は次のように詠まれている。

#### 公讌の詩

曹子建

公子客を敬愛し、宴を終るまで疲るるを知らず。清夜に西園に遊び、蓋を飛ばして相追隨す。明月清景澄み、列宿正に参差たり。秋蘭長坂に被り、朱華緑池を冒ひ、潜魚清波に躍り、好鳥高枝に鳴き、神飈丹靄に接り、輕輦風に随つて移る。飄飄として志意

を放にし、千秋長く斯の若くならん。

#### 公讌の詩

劉公幹

永日行いて游戲し、飲楽猶ほ未だ央ならず。遺思玄夜に在り、相与に復た翱翔す。輦車素蓋を飛ばし、從者路傍に盈つ。月出でて園中を照し、珍木鬱として蒼蒼たり。清川石渠を過ぎ、流波魚防をなす。芙蓉其華を散じ、菡萏金塘に溢れ、靈鳥水裔に宿し、仁獸飛梁に飛ぶ。華館流波に寄り、豁達として風涼を來す。生平未だ始より聞かず、之を歌ふも安んぞ能く詳にせん。翰を投じて長く嘆息し、綺麗忘るべからず。

いずれの詩も鄴宮の宴から詠み起こして、良辰・美景に及び、その美しさをめでて宴のすばらしさを讃めて筆を擱くのである。おそらく、鄴宮における七子の詩はこのような内容で彩られたのであろう。

謝靈運が詩の理想の姿を曹丕の鄴宮詩宴に求めることで、自らの詩の理想を語ったものと思われる。謝靈運は謀反という罪でその不幸な生涯を閉じるが、この詩の理想を描きながら刑死した靈運の死を考へるとき、そこに詩人の死の不幸を思わずにはおかない。むしろ、それゆえにこそ謝靈運はあの鄴宮の君臣和樂の詩宴の中に遊んだのかも知れない。

#### 四 漢文学と和歌——近江朝文学史の課題

額田王の作品は、右に見たような八君臣和楽の詩観を共通の場とする、近江朝の宮廷詩宴にあって、天皇の下した詩の題を例外的に八やまことばVによって試みた作品であったと思われる。題詞のみごとな対句による「春山万花之艶・秋山千葉之彩」という天皇の詔は、まさに良辰・美景という遊宴の条件を提示したものであった。天智天皇の詔は、この君臣一体の詩観の中から鎌足に下されたものであったと考えられるし、その詔を受けて詩人・文人たちが春秋を競う詩を天皇に献上したものとされる<sup>(15)</sup>。そうした詩宴の場に額田王が八やまことばVによる良辰・美景を競う歌を詠んだのである。それは、新しい万葉集の出發を告げる文学史的な問題でもあったといえる。表現の内容に則して見れば、春鳥、春花および秋葉という季節の美しい景物、あるいは従来<sup>(16)</sup>の歌にはないみごとな対句表現などは、明らかに天皇の詔の題を踏まえた良辰・美景による選択であり、また、題の対句に対応する対句表現であることで、そこにこの作品の持つ漢文学的表現の意味を見出すことが出来るであろう。作品それ自体に見る作者の心情表現の構造については、すでに犬養孝氏の著名な論がある。犬養氏はこの作

品が宮廷内の御遊の当座の席において、歌の聴き手への反応をも意識し構成され、またその興趣を十分に情感の極点にまで誘導するだけの効果がたくまれて表出されているということを具体的に論じている。その要点のみを取りあげるならば、春は「冬こもり」から「花も咲けれ」までの發展的律動に共感共鳴を覚え、秋は蕭然と事の成り行きを待ちかまえる。「咲けれど」の「ど」によって春に憂色が見え初め、憂いの中に待っていた秋は、聴き耳を立てる。「山を茂み」「草深み」の対に春はついに憂色につつまれ、秋には喜色が見え初める（第一段）。「秋山の木の葉を見ては」により、喜色の中にある秋は次句に期待し、春は憂色のまま成り行きを危ぶむ。「黄葉をば取りてぞ賞ぶ」に至り、秋は喜色満面となり、春は顔色なく沈黙。だが、「青きをば置きてぞ歎く」で秋は思わぬ憂色に変わり、悲歎の淵にあった春は二度目の喜色がおとづれる（第二段）。「そこし恨めし」で秋は望みなきかと憂色につつまれて沈黙し、春は喜びにはずむ。春秋とも固唾を呑み緊張の極で少休止（第三段の一）。意外にも春の望みは一瞬にして落胆の谷に投げ出され、秋の不安と危惧は、これまた一瞬にして歓喜の岡に「秋山われは」を歎呼して終る（第三段の二）。この犬養氏の心情分析はみごとであり、臨場感あふれる論の

展開である。

おそらく、額田王の作品はこのような場の情況の中で成立したのであろう。だから「春に心を寄せる者も、秋に心を寄せる者も、心情発展の漸を逐うて一喜一憂、全く翻弄され通しで、しかも両者に一刻たりとも緊張をゆるめる時を与へず、最後のせりあげに持ってゆく呼吸、寸分隙のない構成となつてゐる」(犬養氏前掲書)という額田王の緻密さは、女性的情感のそれでもあった。

もっとも、かかる春艶と秋彩とを競うという文雅は、良辰・美景の季節感を基底とするものであり、それは先にものべたように、文学史的情況の問題として考えるべきであらう。その季節感を成立させている重要なことは、ここではハシのふVである。このハシのふVということばを明確にすることが、この作品を解く鍵でもある。周知のように、ハシのふVは今日一般に指摘されているように、自然の美しい景物をへめぐるVことである。早くに鹿持雅澄は「思奴布」には「恋慕ふ」「賞愛む」「堪忍る」「密隠る」の四種あることを指摘し、ここは「賞愛む」という意であると指摘している。<sup>(17)</sup> たしかに、ハシのふVの意味はそれで正しいのだが、むしろ、ハシのふVということばがへめぐるVという意味として成立した内実をどのように考えるかにある。おそらく

く、額田王がここでハシのふVをへめぐるV意味へと近づけたのは、漢語の「賞」および「賞心」を翻訳したのではないかと考えられることである。この「賞」という漢語を、自然をへめぐるV意味に多く使っているのが『懷風藻』の詩人たちであり、その意味では『懷風藻』の特質はハ賞の文学Vにあるともいえるほどである。

この『懷風藻』が賞の文学を形成した背後には、先の謝靈運の影響が認められるように思われる。謝靈運は周知のように、山水に遊び、自然の美しさを「賞」という語で表現したハ賞の詩人Vである。先掲の擬作にあつても、四つの一つに掲げた「賞心」がそれである。この謝靈運の「賞心」が、直接か間接か『懷風藻』の文学を特徴づけることになつたのである。

額田王のハシのふVが「賞」や「賞心」といった漢語によつて成立した言葉であらうと推測するならば、ここに、良辰・美景・賞心という理想とともに、宮廷詩宴という楽事のすべてが揃つた遊宴が実現したことになる。このことを通して、この作品がまさに君臣和楽の遊宴の文学として成立していることを知るのである。

おそらく、和歌が伝統とする季節感の源流はここにあるのではないか。額田王の詠んだ季節感は、詩の中から

取り出されたものだが、その季節感（良辰・美景）は、天皇の遊宴に奉仕するところから出発することになる。そのことをもって君臣の和楽が実現されるとするとき、その季節感には、まさに天下の良辰・美景が競われるのだということの意味し、和歌の季節感がこのことを原点として出発することで、万葉集は季節歌群を成立させたのであり、古今集も他の分類目に先んじて四季分類を尊重したのであらうと思われる。むしろ、古今集こそ遊宴における良辰・美景の和歌が、君臣の和楽を実現する道なのだという確信をもっていた。その情況は、近江朝の遊宴の文学を、歌学として確立して理論的に完成させたのが古今集であったということであらう。

もちろん、季節和歌の成立は、このような詩観によつてのみ可能となった訳ではなく、すでに中西進氏の指摘もあるように、中国の楽府詩に見る「子夜四時歌」もその一つの問題である。<sup>18)</sup>それらの流れの中から、良辰・美景の遊宴へと収約されて行く季節和歌が、もう一度漢文学の洗礼を受けて、古今集の強固な四季分類歌巻を成立させたということである。

この額田王の近江朝文学から古今集までの和歌文学史を埋めるのは、断片的ながらもいくつかの作品によって可能である。額田王には他にも天智天皇を思つて詠んだ

という、

君待つとわが恋ひをればわが屋戸のすだれ動かしか秋  
の風吹く（巻四・四八八）

がある。これも宮廷遊宴における天皇との和楽の献呈歌であるだらうし、巻八の季節歌巻にも重載されている。また、古今集季節歌巻へと継承される万葉集巻八・巻十の春雑歌・春相聞歌群は重要な位置を占めるだらう。巻八春雑歌冒頭の、志貴皇子の「權の御歌」と題する一首は、

石ばしる垂水の上のさ蕨の萌え出づる春になりにつけ  
るかも（巻八・一四一八）

と詠まれ、君臣和楽の春宴の中に歌われた一首だと見ることができると。この歌を「新春の賀宴に祝意を述べる趣で題詠された歌」だと見たのは中西進氏だが、<sup>19)</sup>そのとおりであらう。また、額田王が春を鳴いていなかった鳥が鳴きはじめ、咲いていなかった花が咲いたことを詠んで春という季節感を和歌において確定したが、この春鳥、春花が漢文学の構図の中から出発したことは明らかである。そのような春鳥、春花の賞美を継承する歌宴が催されたのが天平二年正月の大宰府旅人邸での「梅花の宴」であった。そこに見る三十二首の梅花の歌における、

梅の花散らまく惜しみわが園の竹の林に鶯鳴くも

(巻五・八二四)

春されば木末隠れて鶯そ鳴きて去ぬなる梅が下枝に  
(同八二七)

などは、実に明確な花鳥の構図を取る。こうした梅花と鶯への賞美が、旅人を主人とする大宰府官人たちの君臣和楽の構図だと見るとは十分可能であろう。

巻八・巻十の季節歌群が成立する背景にどのような思想が存在したのか明らかにはし難いが、それらの歌群が君臣和楽の良辰・美景の賞美によって成立して来た季節感を踏まえていることは確かであろう。

梅が枝に鳴きて移ろふ鶯の翼白妙に沫雪を降る(巻十・一八四〇) 春雑歌

鶯の木伝ふ梅のうつろへば桜の花の時片設けぬ(同一八五四) 春雑歌

春さればまず鳴く鳥の鶯の言先立てし君をし待たむ(同一九三五) 春相聞

これらはどのような場や情況を持つ歌であるのかかわからない。しかし、このように詠むことが良辰・美景の賞美だという考えがあつて成立している歌であり、季節感である。それが巻八や巻十の季節歌群を考える重要な目安となるであろう。

君臣和楽の宴が良辰・美景を求めることで成立すると

すれば、直接的には応詔献呈の歌にそのような傾向が現われると見ることができよう。応詔歌にはそれぞれの性格があるので、一律に論じることができないが、次のような応詔歌は一つの参考になるであろう。

奥山の真木の葉凌ぎ降る雪の降りは益すとも地に落ちめやも(巻六・一〇一〇) 橘宿祢奈良磨

山の峽其処とも見えず一昨日も昨日も今日も雪の降れば(巻十七・三九二四) 紀朝臣男梶

袖垂れていざわが苑に鶯の木伝ひ散らす梅の花見に(巻十九・四二七七) 藤原永手朝臣

あしひきの山下日蔭纏ける上にやさらに梅をしのはむ(同四二七八) 大伴宿祢家持

ほととぎす此処に近くを来鳴きてよ過ぎなむ後に験あらめやも(巻二十・四四三八) 薛妙観

松が枝の地に著くまで降る雪を見ずてや妹が籠り居らむ(同四四三九) 石川朝臣(内命婦)

これらは良辰・美景を賞美しようとする姿勢によって詠まれており、家持の歌は「梅をしのはむ」という。

もっとも、このような応詔歌もその断片をとどめるものであり、その場の復元は困難であるが、君臣和楽の手段としての良辰・美景の賞美を推測させる歌であることは確かであろう。



このような万葉集の歌に対して、より明確な姿をもっているのは『懷風藻』の応詔詩群であろうと思われる。例えば、石川朝臣石足の「春苑応詔」の詩では、次のように詠まれる。

聖衿良節を愛でたまひ、仁趣芳春に動く。

素庭英才満ち、紫閣雅人を引く。

水清くして瑤池深く、花開きて禁苑新し。

戯鳥波に随ひて散らひ、仙舟石を逐ひて巡る。

舞袖翔鶴を留め、歌声梁塵を落す。

今日徳を忘るるに足れり、言うこと勿れ唐帝の民。

冒頭には、良辰にあたって天子が良い季節を賞し、すぐれた臣下を招いて宴を開くことが詠まれる。続いて天子の庭の美景が描かれて行く。こうした良辰・美景の賞心は天子の徳によって満たされ、天下太平の代と褒められる唐帝（堯帝）の世以上であるというのである。このような詩想は鄴宮の詩宴に見た内容であるが、また、それは『懷風藻』の侍宴応詔詩を貫く詩観でもある。

それは、天皇と臣下との理想的関係を詩宴が形成するということだが、さらには、良辰・美景ごとに天子が臣下とともに詩を詠み交し、よって天下は太平となつて有徳の天子の世が出現するという考えにある。『懷風藻』の序文が近江朝の天下太平の世の実現をのべたのは、こ

うした詩観からであった。

『懷風藻』は、詩の理想の時代を近江朝に置いて、ここに君と臣下との理念としての詩観を説いたが、しかし、それは尚古思想によるものではない。近江朝がすぐにかかる詩観の中にあつて、近江朝漢文学の出發を告げたものと思われる。大陸からの文学を受け入れるに當つて、それは非常に理念的に受け入れられたことを物語っている。儒教的な教化主義の影もそこに読み取れるのだが、すでに当時『毛詩』は読まれていたであろうから、儒教的詩観の現われは不自然ではない。この儒教的詩観によつて、より明瞭に和歌の本質と効用とを説いたのが古今集仮名序であつた。いわば、常にその出發に當つては、理念的なものが求められるということだが、古今集がその詩観の完成であつたとすれば、額田王の作品は、その和歌における出發を告げる作品であつたということにならう。そして、万葉集は形を変えながらも、この額田王から古今集までの間の君臣一体の詩観を断片的ながらも継承して行くのである。万葉集が季節歌群を形成する根柢も、また、和歌が季節の表現へと向かう傾向を多く示すのも、こうした君臣一体を理念とする詩観の中から派生した姿であつたということに他ならない。

## 五 おわりに

以上によってその主旨をまとめるならば、次のとおりである。

近江朝の文学が漢文学を基底に出発することにより、そこには宮廷遊宴の文学が展開した。その遊宴は儒教的な詩の理念、いわゆる君臣一体の詩観の上に成り立った文学の場であった。

だが、近江朝文学のこのような情況は一般論としては妥当だが、ここにはより具体的な詩観があったように思われる。近江朝文学をこのような詩観へ導いたのは、おそらく、謝靈運の「擬魏太子鄴中集詩八首」による魏の曹丕および建安七子の詩観の直接的受け入れがあったからではないか。曹丕および建安七子によって実現された、理想的な君臣和楽の遊宴が、近江朝における宮廷遊宴の原型であったと推定するのである。

謝靈運は、この遊宴において良辰・美景・賞心・樂事の四つが揃ったのだという。その四つが揃うことで鄴宮における理想的な君臣和楽の遊宴が実現したのであった。

このことを受けて近江朝の遊宴が出発したのだとすれば、近江朝宮廷の文学は良辰・美景を天皇と臣下たちと

が共にめであることから出発したということでもある。古の漢詩集である『懷風藻』が、多くが春と秋の季節を賞美する詩である理由の一端をここに窺うことができるだろう。

この詩観は漢詩のみならず、和歌にも及ぶこととなった。額田王の「天皇、詔内大臣藤原朝臣、競春山万花之艶秋山千葉之彩時、額田王、以歌判之歌」は、その情況を語るものである。春山万花の艶、秋山千葉の彩という良辰・美景に対して、額田王は秋の千葉の彩を賞美するのだという判断を示したが、ここに近江宮廷の理想的な君臣一体の詩観が和歌においても実現したのである。

このことから考えるならば、新たな古代文学の出発は、天皇と臣下とがともに良辰・美景を賞美し、詩や歌を詠むという詩観を原点としたことになる。その詩観が漢詩や和歌における季節感とその表現を促したのでということになるだろう。つまり、換言すれば、新たな日本文学の出発は、良辰・美景、すなわち美しい季節と美しい景を詠むことから出発したということになる。それを直接に継承して行くのが漢文学であり、万葉集も断片的ながら季節の和歌を詠む傾向を示し、結果としては巻八・巻十に見る季節歌巻を生み出して行った。

だが、和歌があらためて君臣和楽の詩観を構築するの

は、古今集においてであった。その真名序が「古天子、毎良辰美景、詔侍臣預宴筵者、猷和歌。君臣之情、由斯可見。」というとき、そこには近江朝以降の文学史が示唆されているように思われる。近江朝が愛容したところの詩の理念は、古代文学を地下水として、やがて本格的な漢文学の時代の洗礼を受けて、平安朝の文学に花開くこととなったのである。

1 古今集の成立を考える、『文学』（岩波書店）の特集「古今和歌集への道Ⅱ」（一九八五・十二月、一九八六・二月）には、平安初頭の漢文学を通して古今集の成立を考えようとする論が多くある。

2 中西進氏は奈良朝の文学の定位を、漢詩・漢文が第一等の文学であり、和歌は第二等の文学であったとし、それを奈良朝の根幹の文学のあり方として認めなければならぬとする（「和歌と漢詩」『万葉の時代』歴史公論ブックス13）。

3 「遊宴と漢文」『上代日本漢文学史』

4 「近江朝前後の文学 その一—詩と歌—」『万葉以前—上代びとの表現』

5 「万葉歌の誕生」『額田王論』『万葉集の比較文学的研究』本文は、日本古典文学大系『懷風藻・文華秀麗集、本朝

6 文粹』による。以下同じ。

7 『注釈万葉集（選）』（有斐閣新書）

8 本文は、角川文庫本『古今和歌集』による。以下同じ。

9 「あしわけをぶね」『本居宣長全集』（第二卷）筑摩書房

10 武田祐吉氏は、文雅の遊びとして漢詩文を作らせたのだが、額田王は婦人だから特に歌を以て判定したと考えている。『万葉集全註釈』（三）

11 本文は、国訳漢文大成文学部『文選』による。以下同じ。

12 劉勰の『文心雕龍』では、この「賞」が自然の美をへめけるV意に用いられるようになるのは晋・宋からだという。小尾郊一氏は、「賞心」とは「自然の山水を賞しむ心」つまり「風流の心」であるという。「南朝文学に現

われた自然と自然観」『中国文学に現われた自然と自然観』

13 「楽事」は、一般に遊宴にあつて詩を作ることと考えられている。平原侯植の詩中にも「良遊昼夜にあらず……清辞蘭藻を灑ぐ」と見えた、良遊の清辞を指すといえる。

14 「建安詩の題材と賦」『漢魏詩の研究』

15 契沖は「人々に、をのをの方人となりて、をとりまさりを、あらしめしたまふ」（『万葉代匠記』）という。この「春秋を競う」ことの実態は不明だが、『懷風藻』の詩が、多く春秋を詠む詩として成立している背後に、すぐれた一方の季節を詠むのみで「競う」ことの意味は存

在したと思われる。一首の中に春秋の優劣を詠んだ額田王の作は例外に属するであろう。

16 「秋山われは」『万葉の風土』

17 『万葉集古義』（第一）

18 「自然」『万葉の詩と自然』

19 講談社文庫本『万葉集』(二)の注

付記 本稿は、一九八九年度上代文学会大会（於三重大学）

において口頭報告した内容に加筆補正したものである。当日、中西進氏に貴重なご意見を戴いた。深謝する次第である。